

幼児が伝え合う喜びを味わうための援助

～「かかわり合い」を大切にした言葉かけや場の工夫～



那覇市立真地幼稚園教諭

屋嘉部 智美

目次

I	テーマ設定の理由	49
II	研究目標	50
III	研究仮説	50
	1 基本仮説	
	2 作業仮説	
IV	研究構想図	50
V	研究内容	50
	1 伝え合う喜びを味わうために	
	(1) 幼稚園教育要領における「言葉」の捉え	
	(2) 幼児期の言葉の発達の特徴	
	(3) 伝え合いにおける「聞く・話す」ことの捉え	
	① 「聞く」とは	
	② 「話す」とは	
	2 教師の援助について	
	(1) 幼児理解の重要性	
	(2) 教師の役割	
	(3) 教師の言葉かけ	
	(4) 場の工夫	
VI	保育実践	56
	1 検証保育までの取り組み	
	～誕生会に向けての取り組み～	
	2 検証保育指導案	
VII	結果と考察	58
	1 グループや学級の姿から	
	(1) 結果	
	(2) 考察	
	2 個々の幼児の姿から	
	(1) 結果	
	(2) 考察	
VIII	研究の成果と課題	60
	1 成果	
	2 課題	
	《主な参考文献》	

幼児が伝え合う喜びを味わうための援助 ～「かかわり合い」を大切にした言葉かけと場の工夫～

那覇市立真地幼稚園教諭 屋嘉部 智美

I テーマ設定の理由

近年の急激な社会の変化に伴い、幼児を取り巻く環境も大きく変化している。テレビゲームやインターネットの発達と普及により、幼児が家庭や地域において、人や自然と直接かかわったり遊んだりする機会も減少している。また、共働きや核家族などの増加により、家族とかかわり、ゆっくり語り合う時間も少なくなっている現状も見受けられる。このような社会状況と現状を踏まえ、生涯にわたる人格形成の基礎を培う幼稚園（幼稚園教育）の役割が重要であると捉える。

平成20年3月に告示された幼稚園教育要領 領域「言葉」のねらいには、「人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことなどを話し、伝え合う喜びを味わう」と記されている。このねらいを受け、内容の取扱いには、今回新たに、「幼児が自分の思いを言葉で伝えるとともに、教師や他の幼児などの話を興味をもって聞くことを通して次第に話を理解するようになっていき、言葉による伝え合いができるようにすること。」が付け加えられた。このことから、幼稚園教育において、相手の話を聞くことが基本となる「伝え合い」を通して、幼児の言葉の発達が促されるようにすること、そのために教師のかかわりが重要であることが示されたと捉える。また、幼児が幼稚園の日々の生活の中で話を聞くことの楽しさやその必要性を感じ、他の幼児とのかかわりを通して、伝え合う楽しさや喜びが味わえるような教師の援助が必要ではないだろうか考える。

本学級の幼児の実態を振り返ってみると、自分の思いや考えは積極的に話しているが、相手の反応に構わず一方的に話をしていたり、自分が話したことに満足すると、相手または周りの友達の話あまり聞いていない様子が見られることもある。また、入園当初から生活を共にしてきた友達に対し、親しみを感じ興味関心をもっているが、自分の思いや考えを十分に言葉で表現することができず、友達とのかかわりがなかなか深まらない子もいる。このような実態を捉え、これまでの実践においては、「自分の話を聞いてほしい」という幼児の気持ちを受け止め、じっくり話を聞いてあげたり、幼児の思いに共感するなどの援助を行ってきた。また、教師や友達の話も聞けるように言葉かけをしたり、聞くことの楽しさが味わえる絵本の読み聞かせや集会などでの話の内容・構成の工夫に努めてきた。しかし、幼児の「言葉」を育むための教師の言葉かけや場の工夫は十分であったらうかと、これまでの実践を振り返って反省すると同時に、課題点が見えてきた。幼児の言葉の発達を促していくためには、人とかかわりを通して、伝え合う喜びを味わうことができる体験を積み重ねていくことが必要である。そのために、幼稚園生活において、幼児理解に基づく援助の工夫に努めることが、私自身の課題であると考えられる。

そこで、友達や教師とかかわり合う活動において、幼児が思いや考えを伝え合えるよう言葉かけや場の工夫をすることによって、伝え合う喜びを味わうことができるであろうと考え、本テーマを設定した。

II 研究目標

幼児が伝え合う喜びを味わえるよう、教師の援助について研究する。

III 研究仮説

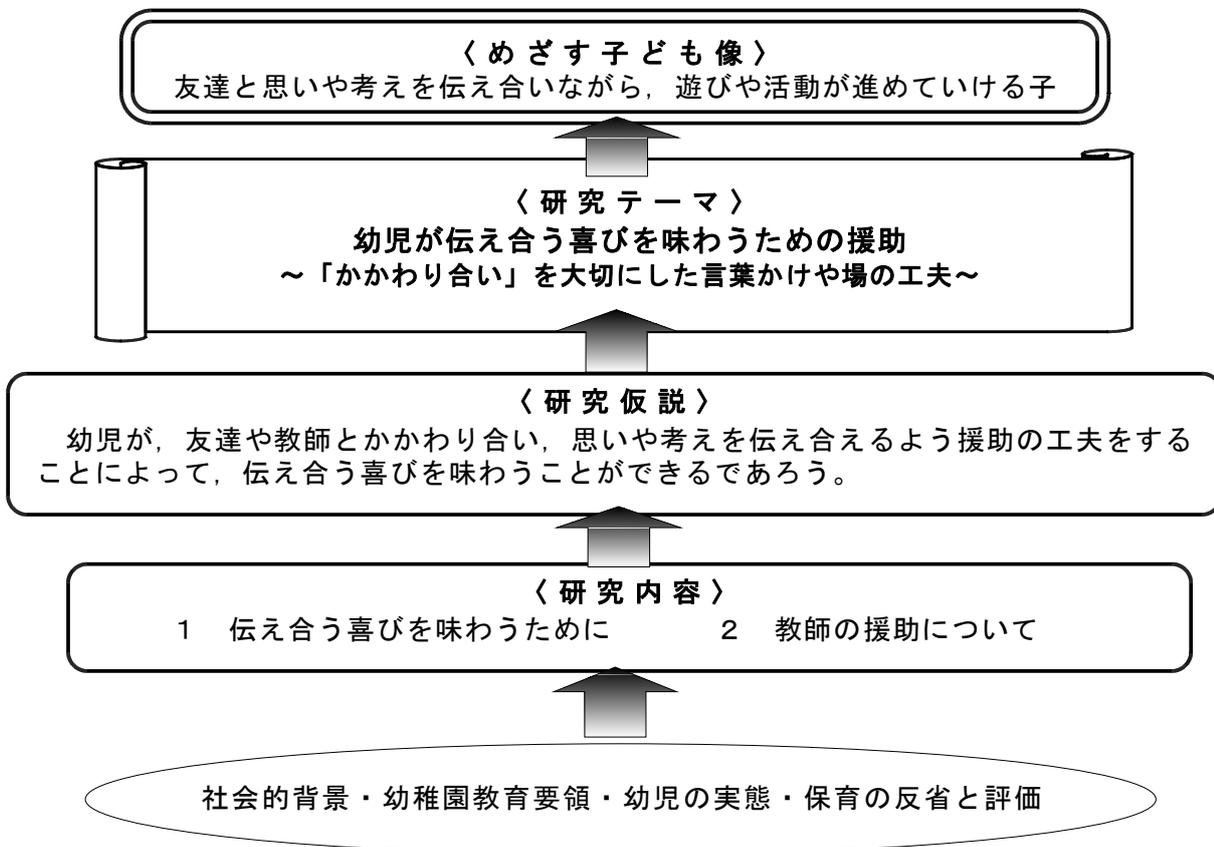
1 基本仮説

幼児が、友達や教師とかかわり合い、思いや考えを伝え合えるよう援助の工夫をすることによって、伝え合う喜びを味わうことができるであろう。

2 作業仮説

「誕生会に向けての取り組み」において、場面や状況に応じた幼児への言葉かけや場の工夫をすることによって、幼児同士の間に思いや考えを伝え合える関係性が生まれ、伝え合う喜びを味わえるようになるだろう。

IV 研究構想図



V 研究内容

1 伝え合う喜びを味わうために

(1) 幼稚園教育要領における「言葉」の捉え

幼稚園教育要領において、領域「言葉」は、幼児の「言葉の獲得に関する領域」として位置づけられているが、幼稚園教育において、それは、学習教材や教師の直接的な指導によって言葉を覚えさせる、または身に付けさせるものと捉えてはならない。幼稚園教育要領 第一節「幼稚園教育の基本」にも示されている通り、幼児の「言葉」に関する教育も、「幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うもの」であることが基本である。

したがって、幼稚園生活において、幼児がかかわることが予想される全ての環境が、幼児の言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う環境であると捉えることができる。ここでいう環境とは、物的・空間的環境である遊具や用具、素材、遊んだり活動に取り組んだりする時間や空間はもとより、人的環境である担任の教師、周りの教師、友達など全てを含んでいる。また、それらが相互に重なり合いつくり出す雰囲気も大切な環境の1つである。しかし、このような環境に興味関心をもち、一方的にかかわるだけで、幼児の言葉が育まれるわけではない。幼稚園教育要領 領域「言葉」の解説には、「言葉は、身近な人とのかかわりを通して次第に獲得されていくものである。」と記されている。このことを踏まえ、幼児の「言葉」＝「言葉に対する感覚や言葉で表現する力」は、幼児が主体的に環境にかかわり、その場や状況を共有する人と言葉を交わしたり心を通わせたりする中で、伝え合う喜びを味わうことによって育まれるものであると捉える。したがって、幼児が伝え合う喜びを味わうために、友達や教師といった身近な環境とのかかわりは重要であると考えられる。

(2) 幼児期の言葉の発達の特徴

『幼児期から児童期の教育』（2006）には、「幼児期は、コミュニケーションの仕方が、身体表現による伝え合いからその土台の上にある言語表現が育ち、言語表現による伝え合いへと、大きく変化していく時期にあたる。」と示されている。実際、家庭環境や生活経験、発達段階の異なる幼児の言語力や表現の仕方は様々で、個人差も大きいという実態も見られる。

また、幼児期は、家庭における保護者との関係だけでなく、自分以外の幼児の存在を意識し、次第に友達とのかかわりを求めていくようになる時期でもある。幼児は、幼稚園での日々の生活を通して、周りの幼児に対し興味関心をもつようになり、徐々にかかわりを求めるようになる。しかし、自分なりの言葉や表情・動作を交えた表現では、相手に自分の伝えたいことが理解されず、そのことにもどかしさやいらだちを感じたり、思いや考えにずれが生じたりすることが原因で、トラブルになることもある。

小川博久らによる『新幼稚園教育要領の解説』（1999）では、「自分なりに表現しても、それが相手に伝わらなければその思いは実現できない。そうした問題に直面したときに、言葉による表現を相互理解のできるものに変える必要性がでてくる。」と述べられている。このことから、幼児期の「言葉」は、自分なりの表現を相手に伝わる表現に変えていくことによって、他者に理解され、その喜びやうれしさを感じる経験を通して豊かになっていくと捉える。また、ここでいう「相手に伝わる表現」とは、自分の思いや考えを的確に表す「言葉」だけの表現ではなく、相手が受け入れやすいまたは受け入れたい話しかた（口調、声の大きさ）、話すときの表情・しぐさなど全てであり、そのような人とのコミュニケーションに必要な態度を体験を通して学べるよう援助を工夫していく必要がある。

(3) 伝え合いにおける「聞く・話す」ことの捉え

① 「聞く」とは

幼稚園教育要領「言葉」の内容の取扱いには、(2)「幼児が自分の思いを言葉で伝えるとともに、教師や他の幼児などの話を興味をもって注意して聞くことを通して次第に話を理解出来るようになっていき、言葉による伝え合いができるようにすること。」

と記されている。このことから、幼児の言葉の発達において、相手の言葉や話を注意して聞けるようにすること＝聞こうとする気持ちをもてるようにすることが、言葉による伝え合いができるようになるために必要な援助の視点であると捉える。

『ここがかわった！NEW幼稚園教育要領・保育指針ガイドブック』（2008）では、聞く力について、「相手の話をじっくり聞き取り理解することはコミュニケーションの重要な柱の1つとなる。それがやりとりに発展していき、小学校の授業の基礎ともなる。」と記されている。また、「相手の話を聞く」ことは、コミュニケーションを円滑にするだけでない。「聞くこと」によって、幼児の思考力や言葉に対する感覚・言葉で表現する力は養われていくのである。また、幼児は「聞くこと」を通して、相手によって話し方や言葉遣いを変えることの必要性に気づいたり、様々な表現の仕方があることを学んだりしている。教師は幼児の姿を捉える際、単に静かにしている姿を「聞いている」と捉えるのではなく、相手の話に興味関心をもって聞き入り、それを理解しようとしているかという幼児の内面の動きを読み取り、理解することが大切である。

② 「話す」とは

幼稚園教育要領解説では、「幼児は、幼稚園生活の中で心を動かす体験を通して、様々な思いをもつ。この思いが高まると、幼児は、その気持ちを思わず口に出したり、親しい相手に気持ちを伝え共有しようとしたりする。このような体験を通じて、自分の気持ちを表現する楽しさを味わうことが大切である。」と記されている。幼児は、どのような状況や場面で心が動かされ、話したくなるのか、幼稚園教育要領解説を参考にまとめてみた。《表1》

《表1》 幼児の心を動かす体験

- ・自然の美しさや不思議さにふれたとき
- ・楽しい活動に参加したとき
- ・おもしろい物語を聞いたとき
- ・友達ともめたり、失敗したとき
- ・遊びの中で新たなことを思いついたり、何かに気付いたり、疑問を感じたりしたとき

以上のことから、心を動かす体験とは、喜びや楽しさ、悔しさや悲しさなどといった感動的・感情的な体験だけでなく、好奇心や探求心、向上心が高まるものやこととの出会いや体験、全てを含んでいると捉える。このような心を動かす体験をした幼児は、身体的な表現も交えながら、自分なりに精一杯伝えようとする。このような「精一杯伝えようとする」思いが、伝え合いにおいて大切なのである。自分の思い受け止めてくれる相手の表情の変化やあいづちなどの反応、応答性のあるやりとりから、「受け止めてもらえた」「伝わった」ことを感じられることによって、話し手の幼児は自分の思いや考えを伝える（話す）楽しさや喜びを味わうことができるのである。

幼稚園教育要領解説には、「幼児は、自分の話を聞いてもらうことにより、自分も人の話をよく聞こうとする気持ちになる」と記されている。このことから、幼児は、話すことの楽しさや喜びを味わい、話を聞いてくれた相手との心のつながりを感じることで（心の交流）によって、他者と思いや考えを伝え合うことができるようになっていくと考える。したがって、伝え合いにおいては、「聞く」と「話す」ことを分けて捉え援助するのではなく、「聞いて、話す」＝「応答性のあるやりとり」ができるよう、またその楽しさや喜びが味わえるよう援助することが大切であると考えられる。

2 教師の援助について

(1) 幼児理解の重要性

幼稚園教育において、幼児理解を図ることは、個々の幼児に応じた援助や環境構成を工夫し、保育実践していく上で、最も重要であり基本であると捉える。教師は、幼児がなぜこの遊び（活動）に興味関心をもったのか、幼児は今何を思い、何を考え、どのようなことを感じているのかなど、行動や言葉には表れない内面の動きを、丁寧に読み取ることが大切である。発達段階や興味関心、これまでの経験が異なる幼児に対し、幼児理解に基づく教師の援助が行われることによって、幼児の心身の発達が保障される保育が展開されるのである。そのために、家庭との連携を図ることと同様に、教師間の連携を図り、幼稚園生活における幼児の姿を多面的に捉え、幼児理解を深めていくことが重要であると考えられる。

しかし、園生活において、子どもたちの遊びは同時に並行して行われていることが多く、教師が一人でその姿や実態を全て理解することは難しい。また、幼児が見せる側面は、相手によって様々である。その意味で、一教師の幼児理解は「“点”にすぎない」と秋田喜代美は述べている。また、教師間のコミュニケーションを通して深める幼児理解を“線”として捉え、個々の幼児に寄り添う保育をするために、「“線”として個々の子どもの発達や集団の発達を理解する必要がある。」と述べている。担任教師があまり意識していなかった幼児の姿を、他の教師が新たな視点で見つめ捉えることによって、個々の可能性や課題が見出すことができ、教師の援助の工夫に生かすことができると考える。

(2) 教師の役割

幼稚園生活において、幼児に安心感を与える教師の存在、一人一人の心身の発達を促す教師のかかわりは重要である。幼児が伝え合う喜びを味わえるようになる上でも、それは同様であると捉える。そこで、幼児が伝え合う喜びを味わうための実践において援助に生かせるよう、多様な役割を果たす教師の援助について《表2》にまとめてみた。

《表2》 「多様な役割を果たす教師」の援助の視点

	教師の役割	援助の視点
①	活動の理解者 として	《見守る》 幼児は自分のことを理解しようと話に耳を傾けてくれたり見守ってくれたりする教師に対し、心を開き、自分なりに思いや考えを表現するようになるのである。したがって、個々の幼児理解に努めると共に、幼児に対し理解を示す言葉かけや援助を行っていく必要がある。
②	共同作業 者（共鳴する者） として	《仲間としてのかかわり》 教師が遊びや活動の仲間の一人として、同じ目線でものやことを見つめることによって、幼児の心の動きや行動を理解する。また、教師の共同作業、共鳴する者としてのかかわりや発する言葉が、遊びや活動の雰囲気盛り上げ、幼児の意欲をさらに高める。
③	憧れを形成する モデルとして	《憧れ・モデル》 幼児は、教師の表情や声、作り出す雰囲気憧れを抱き真似ることから、言葉や行動の仕方、話の聞き方や話し方などを身に付けることもある。幼児が教師の言動から受ける影響は大きいことを意識し、自覚して行動することが大切である。
④	遊びの援助者 として	《発達の支え》 援助する際、幼児一人一人の発達段階を踏まえた援助の仕方やその場・状況に応じた援助のタイミングが大切である。幼児の発想やあそびの展開に応じて柔軟に援助することによって、幼児の体験は豊かになり、その中で発達に必要な経験を積み重ねていくのである。

(3) 教師の言葉かけ

教師が幼児に働き掛けるとき、「言葉かけ」の援助は重要である。幼児が主体的に環境にかかわる姿を見守りながらも、幼児と様々な人やもの、こと（事象）を関係づけていけるよう教師が言葉かけをすることによって、幼児の心が動き、伝えたい思いが膨らんだり、周りの人と伝え合うことが必要な状況が生まれたりする。また、人とのかかわりを通して、伝え合う楽しさや喜びを味わう経験をすることによって、幼児の言葉で伝え合う力も徐々に育まれていくと考える。

『保育用語辞典』（2010）には、「関係づける援助」について以下のように記されている。

「人とのかかわりをひろげる、遊びと遊びをつなげる、他の場や状況の変化に着目させる等、幼児の生活を豊かにしていくために保育者が意図的に幼児同士の関係や場の関係、遊びの関係等をつなぐかかわりをいう。」

幼児を身近な環境である人・もの・ことと関係づけるためには、教師の言葉かけの工夫が必要である。ここでいう「言葉かけ」とは、直接的に幼児の欲求を満たしたり、幼児の困っていることや疑問を解決したりするための援助ではない。幼児と周りの人・もの・ことをつないだり、その関係性を広げたり深めたりするための援助であると捉える。そこで、幼児が伝え合う喜びを味わうためには、幼児に「安心感や自信をもたせる」、「人・もの・ことに興味関心をもたせる」、「自分なりの思いや考えがもてるようにする」ことなどを教師が意図しながら言葉かけをすることが大切であると考え。また、言葉かけをする際、言葉以外の要素（教師の表情、目線、姿勢、幼児との位置関係、醸し出す雰囲気）も合わせて幼児に作用していることを教師が意識することも大切である。

以上のことを踏まえ、本研究における「言葉かけの視点」を、**認**「認める」、**気**「気づかせる」、**投**「投げかける」の3つとする。言葉かけを工夫するにあたり、『保育用語辞典』に記された「認める援助」と「投げかける援助」《表3》も参考にした。

《表3》「認める援助」・「投げかける援助」

◆ 認める援助

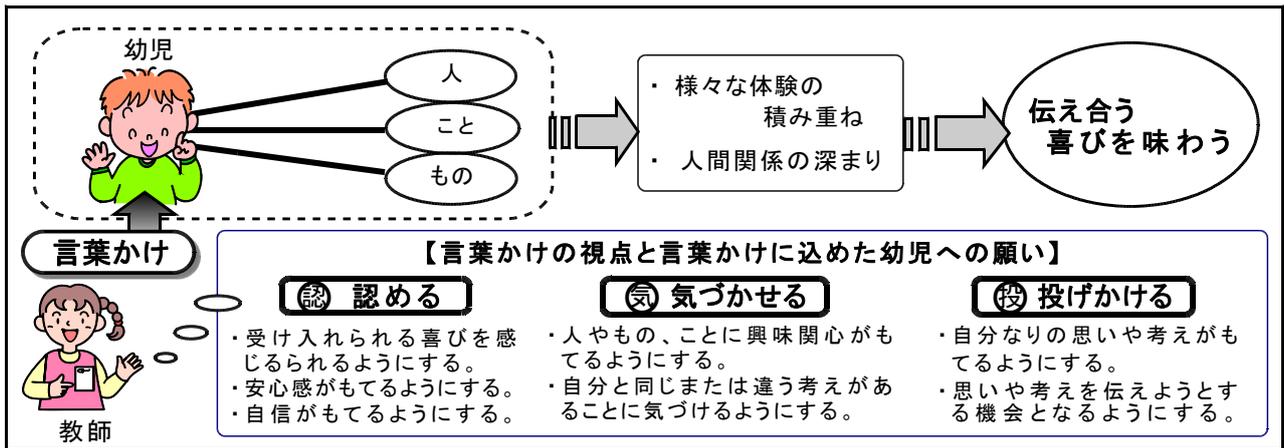
幼児が自分で努力したこと、工夫したこと、葛藤や挫折を乗り越えたことなどをあたたかく受けとめ、ともによるこんだり励ましたりする援助のあり方をいう。（後略）

◆ 投げかける援助

保育者が教育的な意図をもって、ある状況をつくりだし幼児に出あわせたり、幼児が活動する場面でそのあそびや活動がさらに楽しく充実するであろうと思われる保育者のアイデアや考えを提案するなどの援助のあり方をいう。（後略）

「言葉かけ」の援助は、場面や状況によって画一されたものではなく、場面や状況も踏まえつつ、幼児一人一人の心に響くもの（言葉かけ）でなければならない。その意味で、幼児一人一人の実態を把握することや、その時々幼児の内面を読み取ることなど、幼児理解に努める教師の姿勢は重要である。

《図1》は、幼児が伝え合う喜びを味わうようになるために、幼児と人・もの・ことを関係づけていく教師の言葉かけを位置づけ、示したものである。



《図1》 幼児と人・もの・ことを関係づける教師の言葉かけ

(4) 場の工夫

幼児が伝え合う喜びを味わうためには、他者とかかわり、伝え合う経験ができるような「場」が必要であると考え。幼稚園教育要領解説には、「幼児が集中して（話を）聞けるようになっていくためには、話し手や話の内容に興味や関心をもつことができるように、落ちついた場を設定し、話の内容、伝え合うための工夫や援助を行い、教師も幼児と共に聞くことを楽しむという姿勢をもつことが大切である。」と記されている。このことから、落ち着いた場を“設定”するだけでなく、その「場」において、「互いにかかわり合い、話を聞くことの楽しさや伝え合う喜びが味わうことができるようにすること」を教師が意図して、援助することも場の工夫の重要な手立てであると捉える。したがって、本研究においては、幼児が互いに「**☒**：かかわり合えるようにすること」や、「**☒**：話し合えるようにすること」を視点にして、「場の工夫」をする必要があると考える。

そこで、「誕生会に向けての取り組み」を計画し、その中での「場の工夫」を援助の1つとして取り入れる。「誕生会」は、幼児がこれまでの園生活において何度も経験してきた行事であり、子どもたちにとって、共通の経験である。したがって、活動に取り組む中で、2つの視点を踏まえた「場の工夫」をすれば、幼児の主体性が発揮されるであろう。また、これまでの経験や、経験を踏まえた新たな発想（アイデア）が、「伝え合い」をより楽しく、より活発にすると考える。《表4》は、「誕生会に向けての取り組み」における「場の工夫」の視点と内容についてまとめたものである。

《表4》「誕生会に向けての取り組み」における「場の工夫」の視点

視点	☒ ：「かかわり合える」ようにすること	☒ ：「話し合える」ようにすること
工夫の内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ 幼児の動線や視界に配慮し、活動（装飾づくりや準備、出し物の練習）に取り組める場を設定したり構成したりする。 ・ 教師も幼児と一緒に活動を楽しむ。（人的環境、協同作業者・共鳴する者・モデルとしてのかかわり） ・ かかわり合いながら活動に取り組むことができる時間や空間を確保し、友達と一緒に活動を進めていく楽しさや充実感が味わえるようにする。 ・ 活動に幼児の発想やアイデアを取り入れていくことによって、幼児の主体性が発揮されるようにする。（活動に必要な用具や材料を準備する。） 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 活動（装飾づくりや準備、出し物の練習）の中で話し合いが必要な状況が生まれたときは、その時々幼児（子どもたち）の様子に応じて、話し合うことができるような時間や空間を確保する。 ・ 活動の前後にグループや学級で集まる場を設け、互いに思いや考えを出し合うことによって、活動に対する意欲や仲間意識が高まるようにする。また、グループや学級で集まって話し合うことで、自分と同じまたは違った考えに触れることができるようにする。

VI 保育実践

1 検証までの取り組み ～ 誕生会に向けての取り組み ～

①～④ …教師の役割 (表3参照)
 認 気 投 …言葉かけ (図1参照)
 ㊦ ㊧ …場の工夫 (表4参照)

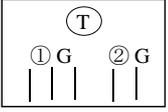
	・ 幼児の姿／活動の様子 ★教師の読み取り (第32～34週)	* 言葉かけの工夫 ◎ 場の工夫
◇ (誕生会について学級で話し合う)	【ねらい】 1月の誕生会を本学級が担当することに対し、意欲と期待感がもてるようにする。 ・ 学級で12月下旬の生活発表会を振り返る話し合いでは、幼児から次のような発表(発言)があった。 「(創作紙芝居は)話し合ってたんだよ。」 「一人ではできんよ。」 「楽しかったな」「またやりたいな」 ★ 共通の感動体験の中で味わった様々な経験や感情を共有している。	* 学級全体や幼児一人一人に対して、頑張ったことを「認める言葉かけ」で励まし、自信を持たせる。 ①・認 * 誕生会取り組みへの意欲を高めるために、「1月誕生会を本学級が担当する」(投げかける言葉かけ)を提案する。 ④・投 * 子どもたちの意見やアイディアを認め取り入れながら、プログラムや出し物、準備するものについて板書する。 ④・認
◇ 展 開 (誕生会の準備や出し物等の練習)	【ねらい】・ 思いや考えを伝え合いながら、幼児が主体的に活動を進めていけるようにする。 ・ 子どもたちなりに工夫したり協力したりしながら、活動することを楽しむ。 ○ 壁面などの装飾づくり ・ 3名の幼児が装飾作りに興味関心を示し、取り組んでいる。 ・ 他の幼児は、思い思いに自分の好きな遊びをしている。 ○ 出し物の練習 ・ これまでの遊びや行事の中でやったことのあるダンスをやりたい、またはやったほうがいいという意見が多い。 ・ 出し物(ダンス)の振り付けや立ち位置について相談する際、意見がぶつかり、なかなかまとまらない。(いざこざが生じるときもある。) ★ これまでの自分たちの経験を基に、各々が誕生会の場をイメージしながら考えたり、話し合ったりしている。 ・ グループ内で振り付けや並び方について共通理解が図れていない様子が見られる。 ・ グループでの練習や話し合いが、集中して取り組めなかったり友達とふざけたりすることが原因で、思うように進まない(できない)ときがある。	◎ 他の遊びをしている幼児からも見える場所に壁面づくりのコーナーを設ける。 ④・㊦ ◎ 子どもたちと一緒に装飾作りを楽しむ。 ②・㊦ * 幼児同士で声をかけ合いかわるきっかけが作れるように、装飾作りに取り組む幼児に対し、周りの幼児の様子に「気づかせる言葉かけ」をする。 ④・気 * 子どもたちが話し合い協力しながら練習を進めている姿を「認める言葉かけ」をする。 ④・認 * 幼児同士で話し合っている場面において… ・ 子どもたちの様子を見守りながらも、状況に応じて話し合いの仲介となり、幼児なりの表現では十分伝わらないことを言葉で補ったり、互いの言いたいことを整理したりする。 ①④・投 ・ 投げかける言葉かけ「どうしたらいいのかな？」によって、幼児自身が考え、自分なりの思いや考えがもてるようにする。(→ 伝え合いへ) ③・投 ・ 互いの顔(反応、様子)を見ながら話し合えるように気づかせる言葉かけをし、仲間の一人となって話し合いに加わる。 ③・気 ◎ 学級で活動の様子について振り返る場を設ける。 ④・㊦ その際、話を聞くとときや話す(伝え合う)ときの態度について考えたり気づいたりできるよう言葉を投げかける。 ④・投気

2 検証保育指導案

(1) 保育仮説

グループの活動において、友達と思いや考えを伝え合いながら取り組めるよう援助することによって、友達と一緒に活動する楽しさや伝え合い喜びを味わうことができるであろう。

(2) 保育の展開

<p>幼児の姿</p>	<ul style="list-style-type: none"> 誕生会の準備や練習に友達と声をかけ合い、意見を出し合ってグループの出し物の振り付けやかけ声、並び方などを決めていく様子が見られる 出し物の練習をする中で、意見がぶつかったりずれが生じたりすることがあり、自分の思い通りにいかないことへの不満を表情や態度で表す子がいる。自分とは違う友達の意見には否定的であり受け入れようとしない子もいる。 誕生会を明日に控え、意欲が高まっている。 	
<p>ねらい</p>	<ul style="list-style-type: none"> 友達と思いや考えを伝え合いながら活動に取り組む楽しさや喜びを味わう。 誕生会への期待感や意欲が高まるようにする。 	<p>内容</p> <ul style="list-style-type: none"> これまでの取り組みをみんなで振り返る 各出し物（ダンス）グループで話し合ったり練習したりする。 今日の活動について、みんなで振り返り話し合う。
<p>時間</p>	<p>予想される幼児の活動</p>	<p>* 教師の援助 ◎ 環境構成の工夫 ★ 評価</p>
<p>9:30</p> <p>● 誕生会に向けての取り組み 【教室】</p> <p>[場面1]</p> <ul style="list-style-type: none"> 今日の活動について先生の話聞く。 <p>9:35</p> <p>[場面2]</p> <ul style="list-style-type: none"> 各グループで出し物の練習をする。 ① マルモリグループ (玄関前) ② けんさんびんグループ (教室) <p>10:00</p> <p>[場面3]</p> <ul style="list-style-type: none"> 今日の練習を振り返り、頑張ったことや楽しかったこと等について発表し、話し合う。 <p>10:15</p> <p>(担任へ引き継ぐ)</p>	    	<p>※ 今日の練習で頑張りたいことについてグループで話し合う場合、朝の会で設ける。(各グループの今日のねらいを決める。)</p> <p>* 各グループが今日の練習で頑張りたいことを確認し、意欲がもてるよう言葉かけをする。</p> <p>《保育仮説の検証》</p> <p>◎ 各グループの練習場所は、互いのグループの練習の様子が感じられる空間となるよう配慮する。</p> <p>* 練習の様子を見守りながら、必要に応じて幼児同士で思いや考えを伝え合いながら練習が進めていけるよう言葉かけをする。</p> <p>* 友達と思いやイメージを共有するため伝え合いながら練習を進めている様子や頑張りを認める。</p> <p>* 幼児同士の間に意見のずれが生じた場合は、幼児同士が互いに言い分に耳を傾け話し合えるよう仲介となる。</p> <p>* 個に応じた言葉かけを心がけ、幼児の意欲を受け止めつつも、友達の様子に目を向けさせ、友達の話も聞き入れながら練習を進めて行こうという気持ちをもてるようにする。</p> <p>★ 幼児同士で伝え合いながら活動を進めているか。(観察, 発言)</p> <p>* 幼児の思いや考えに教師が耳を傾け、そのよさを認め、周りの幼児に伝えられるようにきっかけをつくる。(周り幼児にも言葉かけをする。)</p> <p>* グループで話し合う場面では、一人一人の考えやを認める言葉かけをすることによって、幼児同士でも認め合える雰囲気をつくっていく。</p> <p>* グループの練習が停滞している場合、子どもたちなりの工夫やアイデアが生まれるように、子どもたちに疑問や質問を投げかける。</p> <p>★ 伝え合う喜びを味わっているか。(観察, 発言)</p> <p>* 幼児が友達に思いや考えを聞いてもらえたり受け入れてもらったときの喜びに共感したり、その思いが膨らむような言葉かけをする。</p> <p>* 教師や友達と今日の活動の楽しさを共有したり、頑張りを認められることによって、幼児一人一人またはグループや学級の誕生会本番に対する期待感が高まるようにする。</p> <p>★ 発表したり教師や友達の話聞くことで、誕生会への期待感や意欲が高まったか。(観察, 発言)</p> <p>* 話し合い後、個々の幼児に声をかけ、スキンシップを図りながら、思いに耳を傾け受け止めたり、頑張りを認めたりする言葉かけをすることによって、受け止めてもらった満足感を味わい、取り組んできたことに自信が持てるようにする。</p> <p>[本時の反省・評価の視点]</p> <ul style="list-style-type: none"> 友達と思いや考えを伝え合いながら活動に取り組む楽しさや喜びを味わえたか。 活動の取り組みを通して、誕生会への期待感が高まったか。

Ⅶ 結果と考察

【仮説の検証】 「誕生会」の取り組みにおいて、場面や状況に応じた幼児への言葉かけや場の工夫をすることによって、幼児同士の中に思いや考えを伝え合える関係性が育まれ、伝え合う喜びを味わえるようになるだろう。

1 グループや学級の姿から

(1) 結果

【装飾づくり】

- ・ 3名（自由意志の参加）で始まった活動であったが、参加する人数は徐々に増え、検証保育前日には17名の幼児が取り組んでいた。
- ・ S児が提案した「グループの友達とお揃いのアームバンド」には、周りの幼児の様々なアイデア（各グループでラインの色を変える、グループの名前を入れる など）が取り入れられた。



【出し物グループでの練習】

- ・ 「みんな集まってー」「丸くならう」「〇〇さんもおいで」「〇〇さんの顔が見えないよ」など、幼児同士が互いの顔（反応）を見ながら話し合おうとする姿が見られた。
- ・ 振り付けや隊形について話し合う際、仲間の声や意見を聞こうとする姿が見られた。また、これまで話の聞き手になることが多かったA児が自ら発言し、提案する姿が見られた。

【検証保育 場面3：全体での活動の振り返り】

- ・ 教師や発表する友達の話に耳を傾け、聞いた話に反応したり（表情、うなずき）、応答する姿が見られた。
- ・ N児の「声を出すのをがんばりました。」の発表を受け、聞き手（他の出し物グループ）の幼児から、「声がよく聞こえてたよ。」「うん！聞こえてた!!」「前より声が大きくなってた！」など、N児やN児のグループの頑張りを認める発言があった。

(2) 考察

【言葉かけの工夫】

- ① 教師が、幼児のよさや頑張りを認める言葉かけをすることによって、幼児は安心して自分の思いや考えに自信をもって伝えよう（話をしよう）とする気持ちがもてるようになったと考える。
- ② 幼児が周りの様子に気づけるよう言葉かけをすることによって、友達や活動に対する興味関心が高まり、自らかかわるようになっていったと考える。
- ③ グループや学級で集まって話し合う際、教師が全体に投げかける言葉（「どう思う？」「どうしたらいいかな？」など）は、幼児の思考を刺激したり自分なりに考えたことを発表（発言）するきっかけになっていたと考える。このことから、投げかける言葉は、応答性のあるやりとりをつなぐ役割もしていることがわかった。

【場の工夫】

- ㊦ 幼児の動線や視界を考慮してコーナーや練習の場を配置したことや、教師が幼児と共に活動を楽しむことによって、幼児の友達や活動に対する興味関心や意欲も高まったと考える。
- ㊧ 活動の前後に、学級で集まる場を設け、友達や教師の話を聞いたり話し合ったりすることを通して、幼児は聞くことの楽しさを味わったり、仲間との一体感を感じることができた。そのことにより、活動に対する意欲はさらに高まったと考える。

2 個々の幼児の姿から ～M児・T児・R児の変容を通して～

幼児が、「教師に見守られている」「わかってもらえている」という安心感のもと、友達との間に、思いや考えを伝え合える関係性を育ていけるよう、個々に対する言葉かけの援助に努めた。以下にその言葉かけの援助による幼児の変容（結果）をまとめた。

『言葉かけの視点』を図中では、右記のように示す。

言葉かけの視点

- 認…「認める」
- 気…「気づかせる」
- 投…「投げかける」

	【幼児の姿】	【教師の言葉かけ】	【幼児の姿の変容 (1)結果】
自己主張が強いM児	<ul style="list-style-type: none"> ・ アイディアも豊富で、積極的に発言することができる。 ・ リーダー的存在であるが、自分の思いを通そうとする思いから、口調が強くなったり、自分とは違う意見に対し否定的なところがある。 	<ul style="list-style-type: none"> 気・「Aさんの考え、〇〇なところがいいね。」 (友達の意見のよさに気づかせる) 投・「Nさんはどう思う？」 (周りの様子に目を向けさせる) (聞き手としてのモデル) 認・「どうしたらいいかな？」 (考える間を与える) 認・(友達の意見を取り入れたアイディアを提案したMに対し) 「なるほど！良い考えだね！」 「お友達の話しもちゃんと聞いて考えたんだね。」 気・「Eさん、うれしそうだよ。」 (Mに受け入れられた友達の喜ぶ姿に気づけるようにする) 	<p>友達のよさを認められるように</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 友達の話到最后まで耳を傾けるようになってきた。 ・ M児から他児の意見のよさや頑張りを認める言葉が言えるようになった。 <p>【グループの変容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 話し合いの中で発言する子が増え、言葉のやりとりが活発になった。 
自分本位行動をするT児	<ul style="list-style-type: none"> ・ T児のふざけやおしゃべりが原因で練習が進まなかったり、そのことに対しグループの友達から不満も声もある。 * T児の実態を踏まえ、ふざけやおしゃべりは、恥ずかしさを隠すための行動であると捉える。 	<ul style="list-style-type: none"> 気・「みんな（グループ）困っているみたいだよ…」 認・(頑張っていたところを捉えて) 「Tさんの〇〇（具体的に）なところ、いいと思うよ。」 投・「『Tさんががんばっていたね』って友達が言ってたよ。…うれしいね。」 投・「Tさんは（振りや隊形を）どうしたらいいと思う？」 (仲間としての意識を持たせる) 認・「(相づち)…いい考えだね。」 投・「それど？それから！?…」 	<p>仲間の一人としてかかわるように</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 友達から頑張りを認められる言葉をかけられ嬉しそうな表情を見せるようになる。 ・ 「こんなしたらいいんじゃないか？」と、自ら発言する姿も見られるようになった。 ・ テープ（音楽）係を自らやるようになった。 <p>【グループの変容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ T児の頑張りを認めるようになり、T児にテープ係を任せている。
自分の考えを相手に直接伝えられないR児	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の思いや考えを教師に伝えることはできるが、友達に伝えることには少し消極的である。 	<ul style="list-style-type: none"> 認 (教師にペアのYに対する思いを伝えてきたことに対し) 「そんなことがあったんだね。」 投 「Yさんにも伝えたら喜ぶと思うよ。」 * (Yに対し) 「Rさんが話したいことがあるみたいだよ。」 (= 話すきっかけをつくる) (教師の援助を介し伝えた後) 「伝えられてよかったね。」 気 「(Rの気持ちを聞いたYは)うれしそうだったね。」 	<p>友達と心が通い合う喜びが感じられるように</p> <p>R: 「(ペアのYに対し) 今日の踊りは手がぴったりとあったよね。」 Y: 「ぼくも思った！ 回るところもあってたよな。」 教師: 「RとYの心も通じていたんだね。2人とも同じ気持ちだったみたいね。」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 2人でうれしそうに目を合わせて微笑んでいる。(伝え合う喜び) <p>その後、Y児に直接思いを伝えたり、学級での集まりにおいて、前に出て自分の考えをみんなに伝えようとする姿が見られた。</p>

(2) 考察

【言葉かけの工夫】

- ㊦ 教師が、幼児一人一人の思いや考えを認める言葉かけをすることによって、幼児の心は安定し、周りの友達の話にも耳を傾け、他者の思いや考えを受け入れようとする気持ちをもつことができたと考える。
- ㊧ 幼児が周りの友達の様子（行動、表情、心の動き）に気づけるよう言葉かけをすることによって、友達の気持ちを考え、相手のことを思いやり、互いに言葉をかけ合うことの必要性や大切さに気づくことができたと考える。
- ㊨ 教師が投げかける言葉によって、幼児に自分なりの考えが生まれたり、思ったことや考えたことを伝えてみようという意欲がもてるようになったと考える。

【場の工夫】

- ㊩ 個々の幼児の実態や内面の動きに応じて、かかわり合いを大切にした場を工夫（活動に取り組める時間や空間を確保）することによって、幼児同士が様々な体験を共有することができ、かかわり合う経験を積み重ねることを通して、思いや考えを伝え合える関係性を育むことができたと考える。
- ㊪ 個々の幼児が友達や教師とのかかわりの中で体験したこと（葛藤、伝え合う喜びなど）を他の幼児に伝えたり、体験したことを話題にして学級で話し合ったりする場（学級での集まり）を設けることは、友達に対する親しみの気持ちや理解を深めるために必要な援助であったと考える。

Ⅷ 研究の成果と課題

1 成果

- ・領域「言葉」の視点から理論研究し、言葉かけや場の工夫について、視点を整理したことによって、幼児が伝え合う喜びを味わうための援助に生かすことができた。
- ・誕生会に向けての取り組みにおいて、教師が「かかわり合い」を大切にした援助（言葉かけや場の工夫）を行ったことによって、幼児は友達や教師と様々な体験を積み重ね、伝え合う喜びを味わうことができた。

2 課題

- ・幼児理解をさらに深め、幼児期から児童期への発達の見通しをもって、伝え合う喜びを味わうために必要な環境構成や援助の工夫に、園全体で取り組む必要がある。

《主な参考文献》

『幼稚園教育要領解説』	文部科学省	フレーベル館	2008
『幼児期から児童期への教育』	国立教育政策研究所	ひかりのくに	2005
『教師のさまざまな役割』	秋田 喜代美	チャイルド本社	2000
『計画的な環境の構成』	神長 美津子	チャイルド本社	2000
『保育用語辞典 第6版』	森上 史朗	ミネルヴァ書房	2010
『実践につなぐ ことばと保育』	近藤 幹生	ひとなる書房	2011